

金銅製履／こんどうせいのかつ

(財)遺芳文化財団
日本はきもの博物館学芸課長 市田京子

10年程前ファイバースコープなど最新技術を駆使した発掘調査や、華麗な副葬品が話題を呼んだ藤ノ木古墳をご記憶の方も多いただろう。なかでも、被葬者数に合わせるように二足出土した金銅製履には関心を持たれたことであろう。

藤ノ木古墳は、奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺という如何にも古代の都との関わりを思わせる地にある、6世紀後半の円墳である。その横穴式石室に安置された家形石棺は盗掘を受けておらず、金銅製冠やこの金銅製履など金・銀・ガラスを用いた様々な服飾品が残されていた。



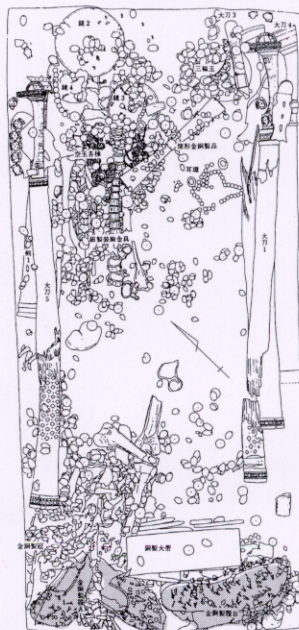
金銅製履Aの復元品

金銅製履は、右の遺物出土状況模式図のように、西壁付近(図の下部)に並んで残されており、仮に図左にあるものを「履A」、右を「履B」とされている。A・Bとも、金銅の薄板で底板と側板2枚を作り、甲と踵の中央で合わせた側板と底板を繋ぎ合わせてある。計測値は履Aが全長38センチ、最大幅約12センチ、最大高約10センチ、履Bがそれぞれ42センチ、約15センチ、約13センチとなっていた。

調査にあたった奈良県立橿原考古学研究所の復元研究委員会では、出土品の幾つかの「製作技法も復元した可能な限り現物に近い」復元製作をされた。写真の履Aは、研究所の許可と指導を得て、日本はきもの博物館が製作させてい

ただいたものである。

金銅板は、水銀を塗布した銅板に金箔を重ねて付けた後、熱を加えて水銀を蒸発させて作られたものである。金銅板には全面に亀甲繋ぎ文という六角形の型押し模様が施され、左右の合わさる面を除いて、底も含めた全面に金の針金で歩揺(動きに連れて揺れる飾り)が付けられている。歩揺は、履Aでは長さ4センチの魚形が12個、直径1.3センチの円形が120個あり、履Bでは木の葉形となっている。履の内側には紫の麻布が張られ、上



出土状況模式図(下記参考文献記載による)

端部は平絹と錦で縁取りされている。

左右は同形で、ほぼ水平な甲上面の先端に向けて底の爪先

部が反り上がっている。素材の性格上鋭角的になっているが、木製で、表面に錦を張った挿鞋や黒漆を塗った浅沓に通じる形態である。このような履は朝鮮半島では25例、日本では14例ほど出土しているという。大型であることや底面にまで歩揺の付くことから死者に履かせる儀礼的なものと考えられるが、実用品が投影されていたのは確かであろう。

参考文献『斑鳩藤ノ木古墳概報』吉川弘文館、平成元年